

第33回関東甲信越性教育研究大会群馬大会報告

ぐんま思春期研究会
会長 宝田智恵子

2025年11月16日、前橋市で第33回関東甲信越性教育研究大会群馬大会を開催しました。メインテーマを「生・性・声 思春期に寄り添う」—その生きづらさの背景と支援のヒントを探る—としました。基調講演及びシンポジウムの概要について報告します。

基調講演には、土井隆義氏（筑波大学人文社会科学系教授）をお迎えしました。

現代の子ども・若者が抱える生きづらさについて、社会構造や人間関係の変化という視点で話されました。かつては家庭や学校、地域といった固定的な関係性の中で育ってきた若者が、現在では人間関係の流動化の中におかれ、「つながっているにもかかわらず孤独を感じやすい」という状況にあることを指摘されました。非行や校内暴力は減少している一方で、不登校や自殺が増加している現状から、困難が外に表れにくくなり、個人の内側に抱え込まれやすくなっていることを示されました。

また、社会が右肩上がりを前提としなくなったことで、若者は将来への不安や他者との比較にさらされながら人間関係を維持することを求められています。友人関係の自由度が高まる一方で、関係を続ける根拠が曖昧になり、常にコミュニケーション能力が試される状況が、若者の不安を強めていると強調されました。

こうした背景の中で、支援者が若者の孤立や不安にどのように寄り添うかが重要な課題であると提示されました。

シンポジウムには、高橋幸子氏（埼玉医科大学医療人育成支援センター・地域医学推進センター/産婦人科助教）、小原直美氏（群馬県立高崎商業高等学校養護教諭）、間々田久渚氏（一般社団法人 ハレルワ代表理事）、藤平和吉氏（利根中央病院精神神経科 部長／群馬大学医学部非常勤講師）をお迎えし、医療・教育・地域の各現場から、「性・生・声」をめぐる具体的な実践と課題について考えました。

思春期外来やユースクリニックの実践報告からは、若者が安心して相談できる「入口」とな

る場の重要性が示され、正確な情報にアクセスできることが、若者の選択肢を広げる基盤となることが語られました。性に関する情報や支援が十分に届かない状況では、若者が孤立しやすくなる現実も指摘されました。

また、学校や医療の現場では、性の問題が単独で存在するのではなく、家庭環境、発達特性、制度や校則などと複雑に絡み合っていることが共有されました。「伝えつつも」「知っているはず」という大人側の認識と、実際に子どもや若者が受け取っている情報との間にギャップがあることも、共通の課題として挙げられました。

さらに、制度や慣習が無意識のうちに子どもたちの生きづらさを強めている可能性についても言及され、男女二分を前提とした仕組みや、当然視されてきたルールを見直す必要性が示されました。

各シンポジストからは、子どもや若者の困難を一つの専門領域だけで抱え込むのではなく、医療・教育・地域が連携し、相談につながる道筋を可視化することの重要性が強調されました。

基調講演とシンポジウムを通して、現代の子ども・若者が直面する課題は、個人の問題ではなく、社会や制度、人間関係の在り方と深く結びついていることが改めて確認できました。性教育や若者に寄り添う様々な支援は、知識を伝えることにとどまらず、安心して相談できる関係性と環境を整えることが不可欠であり、多職種・多領域による連携の必要性が、本大会の大きな成果として共有されました。

